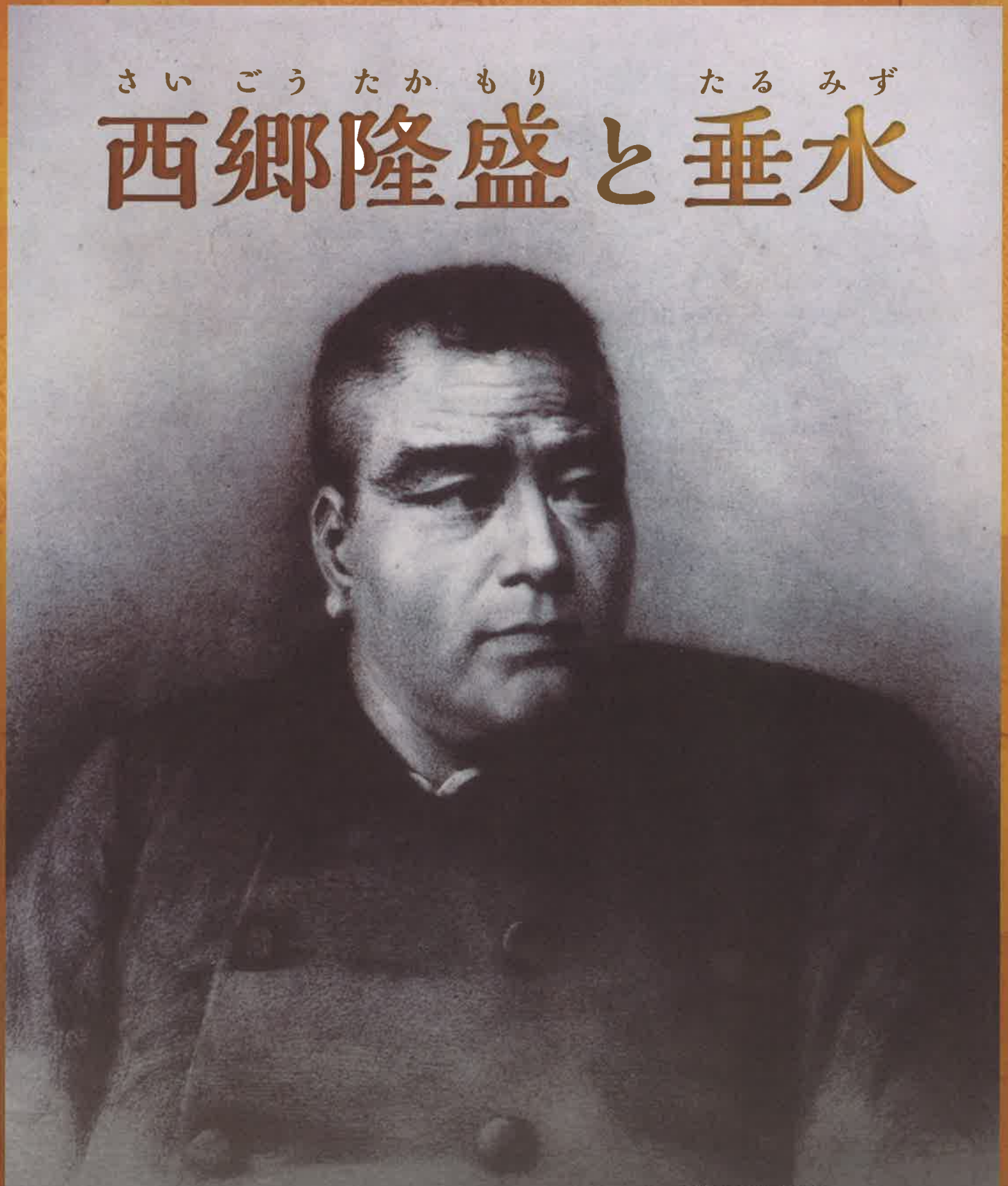
さいごうたかもり　たるみず

西郷隆盛と垂水



西郷隆盛肖像画
(1827-1877)【黎明館蔵】

たるみずしきょういくいいんかい
垂水市教育委員会

ごあいさつ

垂水市教育委員会
教育長　坂元　裕人

垂水市は県都鹿児島市の対岸に位置し、鹿児島県のシンボル桜島に隣接しています。南には薩摩富士開聞岳、東には高隈山系、北には霧島連山を望む景勝の地です。

眼前に広がる錦江湾や、猿ヶ城渓谷、高峠や千本イチョウなど、本市には雄大な自然が豊富にあり、豊かな海山の幸をもたらしています。このように自然の恩恵を受けている本市におきましては、太古より人々が暮らしており、その足跡は連綿と現在まで続いています。

遥か縄文の昔には、柊原に一大貝塚が形成されていました。平安時代には、藤原上総介舜清により垂水城が築かれますが、これが歴史上初めて「垂水」の名が記された出来事とされています。

その後、武家の世から戦国時代へと移り代わっていきますが、垂水でも肥後氏、石井氏等の有力武士達が血で血を争う抗争を繰り広げます。最終的に本城を居城とする伊地知氏が垂水に覇を唱えますが、その伊地知氏も島津氏との争いに敗れます。

江戸時代になると、垂水は島津一門である垂水島津家の城下町として栄えます。安永５(1776)年に開かれた郷校「文行館」からは多くの教育者や芸術家が育ちました。

幕末の藩主島津斉彬は、近代化政策、集成館事業を展開しますが、ここ垂水の牛根でも集成館事業の一翼を担う造船事業が展開され、鳳瑞丸・万年丸が建造されました。

その後、薩英戦争を経た薩摩藩は、列強による植民地化を防ぐため日本が一つにまとまり近代化を図るべく、雄藩の中心となり明治維新を成し遂げます。このとき維新の中心となったのが、斉彬公に薫陶を受けた西郷隆盛と大久保利通でした。

西郷隆盛は維新の中核を担ったにも関わらず、明治６年の政変に敗れ、大久保と袂を分かち、下野します。新政府の政策に不満を持ち、西郷を慕う鹿児島の士族たちは、明治10(1877)年西南戦争を引き起こし、垂水からもたくさんの人々が従軍しました。

西郷隆盛の人となりは、我々鹿児島県人に今なお深い影響を与えています。皆様御承知のように、平成30年に放送されるＮＨＫ大河ドラマでは西郷隆盛が題材としてとりあげられるとのことであり、鹿児島県人の期待は大変高まっていると言えるでしょう。

本書は、私達の郷土垂水と西郷隆盛との関わりについてまとめたものです。本書をきっかけに郷土と西郷隆盛について学ぶ一助となれば幸いです。

目　次

西郷隆盛について …… 3
西郷隆盛と牛根地区 …… 5
西郷隆盛と垂水地区 …… 7
西郷隆盛と新城地区 …… 9

西郷隆盛について

誕生と親族について

西郷隆盛は文政10年12月７日（1828年１月23日）、鹿児島城下の下加治屋町山之口馬場で、薩摩藩（現在の鹿児島県と宮崎県南西部を治めていた）の藩士（各藩に仕えた武士）西郷吉兵衛の長男として生まれました。

次弟は戊辰戦争で戦死した西郷吉二郎、三弟は明治政府で重要な役割を果たした西郷従道、四弟は西南戦争で戦死した西郷小兵衛です。西南戦争では政府軍として西郷隆盛と争い、後に陸軍軍人となった大山巌は従弟にあたります。

島津斉彬の登用

西郷隆盛は薩摩藩士としては決して高くはない家格の家に生まれましたが、家柄に関わらず有能な人材を登用していた藩主の島津斉彬の目にとまり役目を与えられました。その後、西郷隆盛は、国内だけでなく広く海外のことにも目をむけていた島津斉彬から様々な影響を受け、藩外にも通用する人材へと成長していきました。

島津斉彬の死

しかし、安政５(1858)年、島津斉彬が急死し、島津斉彬の弟・島津久光の子である島津忠義が藩主となりました。

西郷隆盛はその頃、島津斉彬の命令で江戸（現在の東京）や京都、大坂で活動していました。しかし、大老・井伊直弼による志士（江戸幕府を倒し、王政を復活させようと活動する武士達）への摘発が盛んになってきており、鹿児島へ帰りました。また、藩内では島津忠義の祖父・島津斉興が政権を握り、中央政府に関与しない姿勢を示しました。

このような情勢下、近衛家から保護を依頼され鹿児島まで来ていた僧・月照が日向国（現在の宮崎県）へ追放されることになりました。このとき同行していた西郷隆盛は、前途を悲観し、月照と入水自殺を図りました。

結果として月照は亡くなり、西郷隆盛は独り助かりますが、幕府の追及をかわすため奄美大島の龍郷村に隠れ住むことになりました。

島津久光の召還と二度目の遠島

文久元（1861）年、島津斉興が亡くなり、島津忠義の父・島津久光が「国父」として後見の役割を果たすようになると、藩をあげての行動を取る際は西郷隆盛を呼び戻すという島津久光と大久保利通の申し合わせに従い、同11月、西郷隆盛に召還状が届けられました。

翌文久２(1862)年、西郷隆盛は村田新八とともに筑肥（現在の福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県）の情報を探るため、先発隊として出発しました。このとき、島津久光は西郷隆盛に一旦下関に留まり、自分の一行が到着するまで待機するよう命じましたが、京都や大坂の緊迫した情勢を聞いた西郷隆盛は、待機の命を破り大坂へ向けて出航してしまいました。

島津久光は、西郷隆盛が待機命令を破ったことに激怒し、西郷隆盛らを捕らえて鹿児島に送り帰すよう命じました。さらに、京都鎮撫（治安を守ること）を命ぜられた島津久光は、自らの指揮に従わず伏見(現在の京都府)の寺田屋に集結した尊攘激派（幕命よりも天皇の命令を重んじる人々）の志士、有馬新七ら８名の上意討ち（主君の命を受けて、罪人を討つこと）を決行しました（寺田屋事件）。その結果、島津久光は天皇に厚く信頼されるようになりました。

捕らえられた西郷隆盛に対して、徳之島への遠島が命じられます。その後、さらに沖永良部島へ遠島の命が下りました。

再度の召還と長州藩

文久２(1862)年の生麦事件をきっかけに起こった文久３(1863)年の薩英戦争で活躍した誠忠組（西郷隆盛、大久保利通らを中心とする藩内組織。精忠組とも）の面々は、西郷隆盛の罪を許すよう久光に願い出ました。島津久光は藩士たちの強い意見を抑えることが出来ず、元治元（1864)年、西郷隆盛を許し鹿児島に呼び戻しました。

京都皇居諸門で長州藩（現在の山口県を治めていた）を撃退した禁門の変を経て第一次長州征伐が行われ、薩摩藩も出陣しました。しかし、その後勝海舟や坂本龍馬と交流するようになっていた西郷隆盛は、長州藩と共同で物事を行うよう働きかけ、慶応２(1866)年に長州藩の木戸孝允、薩摩藩の小松帯刀、西郷隆盛、土佐藩の坂本龍馬らの協議を経て、薩長同盟を結びました。その結果、薩摩藩は第二次長州征伐には参加しませんでした。

大政奉還建白書と王政復古の大号令

慶応３(1867)年６月頃、薩摩の小松帯刀・西郷隆盛・大久保利通は、土佐藩の後藤象二郎、寺村佐膳、福岡孝弟らと会い、薩土盟約を結びました。

同年10月14日、将軍徳川慶喜は大政奉還の上表を朝廷に提出しました。ところが、同じ日にいわゆる「討幕の密勅」が下りました。

西郷隆盛と大久保利通は、徳川慶喜が主導権を奪回することを恐れ、武力を背景に新政府を打ち立てようとしました。その結果「王政復古の大号令」が発せられ、新政府の幹部として総裁・議定・参与の三職が設置されました（薩摩からは藩主島津忠義が議定、西郷隆盛・大久保利通・岩下方平が参与に)。この三職による小御所会議が開催され、併せて徳川慶喜に対して、内大臣を辞め、領地を朝廷に返す辞官納地が要求されるとともに、会津藩（現在の福島県西部を治めた)・桑名藩（現在の三重県の北中部、愛知県弥富市、愛西市の一部、岐阜県海津市の一部を治めた）の京都警衛の職を解き、帰国するよう命令が下されました。

戊辰戦争

慶応４(1868)年１月、大坂の旧幕軍が兵庫に停泊中の薩摩艦を駆逐したことをきっかけに幕府と薩摩は交戦状態に入りました。翌日には鳥羽・伏見の戦いが始まり（戊辰戦争開始)、垂水、新城からも出兵し、それぞれ大坂の警固を行い、奥州（現在の青森県、岩手県、宮城県、福島県、秋田県北東部）各地で戦いました。そして、激戦の末、旧幕軍は大敗しました。西郷隆盛は勝海舟と会談し、両者の尽力により江戸城明け渡し（無血開城）が行われました。

続いて西郷隆盛は上野に布陣した旧幕軍の彰義隊を破り、一方では仙台藩（現在の青森県、岩手県、宮城県、福島県、秋田県北東部を治めていた）を盟主として設立された奥羽越列藩同盟との「東北戦争」に臨み、勝利しました。翌明治２(1869)年、西郷隆盛は桐野利秋とともに函館戦争に臨みますが、到着したときはすでに戦争は終結していました。

西南戦争

新政府成立以降、西郷隆盛は明治４(1871)年に廃藩置県を行うなど明治政府で重要な役割を果たしていましたが、朝鮮への使節を巡る明治６年の政変に敗れて鹿児島に戻り、私学校を設立し若者の教育などに当たりました。

明治９年(1876年)の廃刀令や金禄公債証書条例により帯刀(刀を腰に帯びること)と知行地(大名から家臣に与えた土地)という士族の特権を奪われ新政府に不満を募らせていた士族たちは、熊本県士族の神風連の乱、福岡県士族の秋月の乱、山口県士族の萩の乱などを起こしました。鹿児島でも、士族たちの新政府に対する不満や私学校生徒による火薬庫襲撃、西郷隆盛暗殺の噂などの要因により、明治10(1877)年、西南戦争が起こりました。

西郷軍には九州各地からの士族が加わり、熊本城をめぐる激しい戦いが各地で繰り広げられましたが、最後には政府軍によって鎮圧され、西郷隆盛は鹿児島市の城山で自ら命を絶ち、士族による内乱は終息しました。

西郷メモ

このページには、郷土の偉人西郷隆盛について書いてあります。あなたが新しく知ったことや、西郷隆盛という人物について思ったこと、感じたことなどを自由に書いてみましょう。

西郷隆盛と牛根地区

西南戦争と牛根

西南戦争は九州各地で繰り広げられましたが、垂水の牛根でも争いがありました。

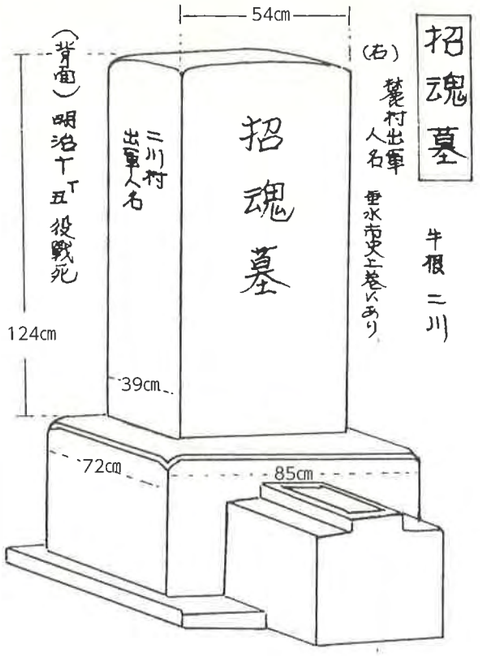
明治10(1877)年６月末、政府軍は高須に上陸しました。そのうち一部は鹿屋、高隈方面、一部は花岡、新城、垂水に進み、先発隊は７月４日、牛根二川に到達しました。５日には百引にも到達しました。

５日、西郷軍は２中隊より成る大斥候隊を牛根へ派兵します。二川で政府軍と衝突したものの、勝負がつかず、恒吉に引き上げます。

８日、西郷軍は中島隊、貴島隊の全力をあげ百引に向かい、政府軍の不意をついて有利に戦を進めます。この結果政府軍はやむなく二川へ退いたと云います。

招魂墓（牛根二川西宝寺隣、マップ①）

牛根村からも51名が西南戦争に従軍しています。戦死した方を弔うため、招魂墓が建立されました。建立したのは初代牛根邑戸長を務めた酒匂竜五郎です。正確な建立年月日は分かっていません。



牛根二川西宝寺隣招魂墓

戦死者　４名

生存者　47名

牛根麓　22名
辺田　３名
二川村　22名

従軍者　計51名

隈元一男家

隈元一男氏は牛根の郵便局長を務めた人です。西郷家と深く親交があり、隆盛の弟吉二郎の子隆準の出した母の年忌のときの招待状や、その他手紙等が残っていたそうです。西郷菊次郎氏や隆準氏はよく釣りに来て泊まったと云われています。

伝えられている当時の様子

- 牛根の烏帽子岳（マップ②）に西郷軍、上ノ原岳に政府軍が陣取り、両方から撃ち合いになったことがありました。このとき多数の死傷者が出たので、二川有誠という人の自宅が野戦病院に使用され、両軍共に治療したと云われています。

  烏帽子岳周辺では、現在も当時のものと思われる弾丸が出土すると云われています。

- 二川に長浜カナという人がいました。この人は、二川が戦地になったとき、西郷軍の中に夫がいるのではないかと密かに探しにいったと云われています。その結果夫と会えたかどうかは不明ですが、危険を顧みず夫を探しにいった愛情の深さに胸を打たれる逸話です。

- 隈元真浄坊（静家）という人は、寺田屋事件の頃から西郷側近の諜報者（敵の情報を密かにさぐる人）として活躍したと云われている人です。西南戦争の際も山法師に化け、県内で活躍したそうです。諜報者という職業柄、自宅にいるときも用心していたようで、櫃（かぶせ蓋がついた箱）の中に隠れて過ごしており、食事もその中でとっていたとの話が伝わっています。

西郷メモ

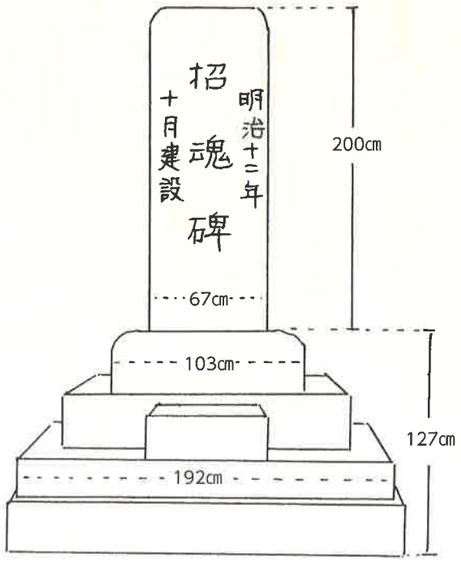
このページには、西郷隆盛と牛根地区の関わりについて書いてあります。あなたが新しく知ったことや、西郷隆盛と牛根地区との関わりについて思ったこと、感じたことなどを自由に書いてみましょう。

西南戦争従軍者の様子
（「西南之役従軍記」に掲載されている山口栄之氏によるカット）

招魂碑（鹿児島神社境内、マップ③）

明治12(1879)年10月、生還者一同が分担金を出して建立したものです。当時の金額で総額167円90銭との記録があります。もともと中町の墓地近くに有りましたが、日清戦争の忠魂碑が建立されたとき、現在地に移されました。

鹿児島神社の境内に、日清・日露両戦役の石碑と並んで一番北側に立っています。明治13年２月13日に祭式が行われたとの記録があります。



鹿児島神社境内招魂碑

戦死者	**85 名**
生存者	**365 名**
後馬場方面	29 名
犬馬場方面	25 名
中馬場方面	33 名
早馬方面	25 名
上松原・中松原方面	25 名
下松原・下宮方面	21 名
敷根方面	31 名
下福町方面	31 名
中町・下町方面	10 名
本城方面	46 名
水之上方面	40 名
高城方面	6 名
新御堂方面	14 名
上之宮方面	5 名
市木方面	10 名
元垂水方面	7 名
中俣・海潟方面	7 名
従軍者計	**450 名**

西南戦争と垂水

昭和３(1928)年、郷土史家・山口栄之氏が、15歳で西南戦争に従軍した立山健氏（戦争の当初から田原坂、豊後路、可愛獄突破、城山陥落まで同行）を中心に、聞き取り調査の結果をまとめたものと、従軍者・堀之内雄輔氏の日記をまとめた「西南之役従軍記」（垂水市教育委員会　昭和52(1977)年）が発行されています。

私学校分校（マップ④）

- 明治６年の政変に敗れた西郷隆盛を慕う青少年を教育指導する目的で、明治７(1874)年私学校が設立されました。篠原国幹の主宰する銃隊学校と、村田新八の監督する砲兵学校からなり、県内に136の分校をもっていました。このほかに、私学校と同じ趣旨で設立された賞典学校、吉野寺山の開墾社が設立されました。県令大山綱良は、県下の行政組織を私学校派で固めました。垂水も麓を中心に私学校派が多くいました。

明治９(1876)年11月ごろ、今の垂水小学校お長屋で私学校が始まります。当時は５人組を組まないと入学できませんでした。授業の内容は剣術が殆どで、申し訳程度に漢学の講義があったと云われています。

ここで学んだ多くの者が西南戦争に従軍しました。

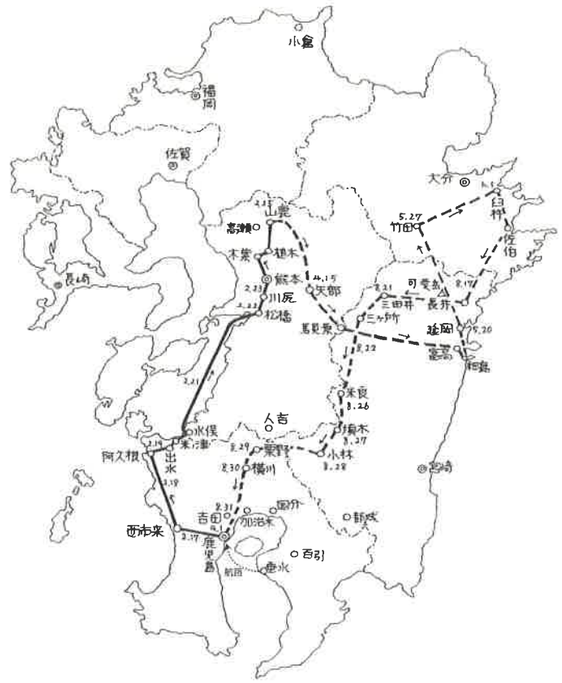
西郷メモ

このページには、西郷隆盛と垂水地区の関わりについて書いてあります。あなたが新しく知ったことや、西郷隆盛と垂水地区との関わりについて思ったこと、感じたことなどを自由に書いてみましょう。

伝えられている当時の様子

- 明治10（1877）年２月10日、船手の下の浜（マップ⑤）から、数10艘の船で鹿児島に出陣しました。17・8歳から2・30歳くらいまでの年齢の人が最も多く、中には4・50歳くらいの老武者もいたと云います。総勢400数名でした。
- 入隊までの間の旅費とその後の小遣いとして、少なくない金額の金子が必要でした。中には、戦争に行く人に金を貸すと、返ってくる見込が無いと借金に応じてくれる人がおらず、困ったということもあったそうです。

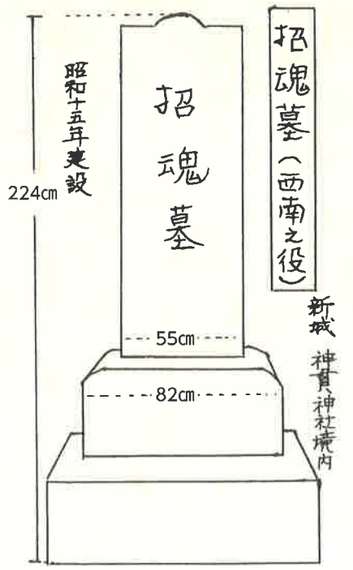
立山健氏転戦図



15歳で西南戦争に従軍した
立山健氏の転戦図

招魂墓（新城神貫神社境内、マップ⑥）

明治15(1827)年９月、戸長・中村思無邪氏により建立されました。大正13(1924)年、神貫神社境内に移転。昭和23(1948)年、日清・日露・第二次世界大戦の慰霊碑とともに現在の位置に移されました。



新城神貫神社境内招魂墓

戦死者　24名　　生存者　85名　　従軍者　計109名

上田家との関わり（マップ⑦）

明治７(1874)年立春の頃、明治６年の政変に敗れた西郷隆盛が新城に狩りに来るようになります。そのときの狩宿は大都の上田親豊宅でした。

上田親豊の妻マスの弟（兄とする資料も在る）は市之助という人で、この人は戊辰戦争の際、西郷隆盛に従って出征した経歴もあります。西郷隆盛は明治６年の政変に敗れ、鹿児島に戻り、県下のあちこちで狩りをしていましたが、その際市之助は供を良くつとめたと云われています。

西郷南洲翁仮宿跡

このことを知った当時の戸長・安田為僖氏や前戸長・中村清徳氏は、上田氏と一緒に西郷隆盛を歓待したと云います。また、狩の御供役として、新城の狩の名人鹿屋駒之助氏、兎取りの名人中園休次郎氏、鉄砲うちの名人榎屋与助氏の３名が西郷隆盛に同行したと云われています。

明治10(1877)年２月４日、根占から鹿児島に帰る途中上田家に立寄り「当分は会えないので、元気で暮らしてくれ。」と言い、茶も飲まず去って行きました。これが西郷隆盛と上田家の今生の別れになりました。

上田家では、西郷隆盛の使用した寝具、家具類、親筆等を大事に保存していましたが、第２次世界大戦のとき、空襲を受け焼失してしまったとのことです。

西郷隆盛と新城の学校

西郷隆盛は、明治６(1873)年、郷校松尾小学校（後の新城小学校）と大都にあった私塾高野塾（明治８(1875)年松尾小学校に統合）を視察しました。松尾小学校での西郷隆盛の話に、生徒達はたいへん感動、奮起したと云われています。

新城私学校分校（マップ⑧）

明治８(1875)年１月、私学校新城分校が開校しました。校長は戸長の安田為僖が務めました。本部は松尾小学校内に置かれ、松尾小学校の教師が私学校の教師を兼任しました。大浜に設けられた陸軍訓練所で行われた軍事訓練には特に比重が置かれていました。

西郷隆盛は新城へよく狩りに来ており、西郷隆盛を慕うものが多かったため、入学者も多かったと云われています。

明治10年西南戦争が始まると、新城村からは新城隊が組織され西郷軍に参加、松尾小学校の教師は新城隊の幹部となり、私学校は休校となりました。

伝えられている当時の様子

- 西郷隆盛は、新城での初めての狩りで、10頭の猪の集団と出会い、みごと10貫目位（約40kg）の猪を仕留めました。この成果に喜び、以降度々新城を訪れることになったと云われています。
- 西郷隆盛は烏賊引きも楽しみました。西郷隆盛が小舟に乗ると、船が深く沈むので「おいどんが乗ると船も難儀をしもんど。」と大笑いしたと云われています。
- 西郷隆盛が新城に滞在しているときは庶民的な生活で、木綿の絣を愛用したと云います。新城では、鹿屋郷之原の緑茶、木場の田の米、浜どりの新鮮な魚介類で西郷隆盛をもてなしたといわれています。
- 西郷隆盛は味噌汁が好きで、鯛の火ぼかしの出し汁で手作りした味噌に青物を入れると美味しいと喜び、飯は米に甘藷を入れたものを喜んだと云われています。また、そばが好きで、火ぼかしの鯛の煮出し汁にごまや山椒の実、小みかんの皮を混ぜ、せんもとを刻み、ひね物として差し出すと大変喜び、「とてもおいしか、まいっぺどま気張っ食おかい」と言って数杯食べたと云います。
- 上田親豊の二女、大津シモさん（当時10歳前後）の回想です。「逗留の際は「シモちゃん、シモちゃん」と可愛がっていただき、西郷翁の給仕をしたこともありました。あるとき、何が好きか聞かれたので三角菓子が好きだと答えると、買ってくださいました。近所の子どもにも優しかったです。城山で戦死の報を聞いたときは、数日ろくろく食も通らず泣いて供養しました。」
- 諏訪の川畑長次郎という人がいました。病身でしたが、草鞋づくりが上手く、西郷隆盛は狩りの際、長次郎の草鞋を愛用し、「私は足が大きいから。」と言って２倍の代金を支払ったと云われています。長次郎さんは、「私が病身であるのを憐れんでくださっているのだろう。」といつも感謝していたと云います。
- 西郷隆盛は鹿児島から来るときは船を使用したり、垂水から陸路で来たりしていましたが、帰るときはいつも船でした。その際は新城の大型漁船をきれいに洗って使用しました。船は四挺櫓（４本の櫓を使って操る船）で水夫は５人が普通でした。渡航時間は天候次第で５～８時間要しましたが、その間西郷隆盛はものも言わずじっと座っていて、鹿児島に着くと「おやっとさあ。」と礼を言って上陸したと云います。

小城家と西郷さあの刀

西郷隆盛は麓の小城仙次郎の家にもよく逗留したと云われています。腰に小刀を一振差し、愛犬「ツン」を伴っていたと云います。

仙次郎の子・千太郎（当時６、７歳）が、西郷隆盛が来るたびにこの刀をねだったところ、根負けした西郷隆盛が小刀を千太郎に与えたと云います。この刀は「西郷さあの刀」と呼ばれ、小城家の守り刀として小城家の氏神である小屋敷大明神社（小城家屋敷内にあったが、神貫神社に合祀された。祭神は火神加具都知命）におさめられていたとのことですが、現在は消息不明となっています。

西郷メモ

このページには、西郷隆盛と新城地区の関わりについて書いてあります。あなたが新しく知ったことや、西郷隆盛と新城地区との関わりについて思ったこと、感じたことなどを自由に書いてみましょう。

西郷隆盛に関する主な出来事

和暦(西暦)	垂水	鹿児島	日本
文政10(1828)年		西郷隆盛生まれる	
嘉永4(1851)年		島津斉彬が藩主となる。集成館事業開始	
嘉永6(1853)年			ペリー来航
安政元(1854)年	斉彬、牛根造船所で鳳瑞丸、万年丸の建造開始	洋式帆船　昌平丸完成	日米和親条約
安政5(1858)年		斉彬急死、弟久光の子　忠義が藩主となる	日米修好通商条約、安政の大獄(～60年)
万延元(1860)年			桜田門外の変で井伊直弼暗殺
文久2(1862)年		久光が率兵上京、寺田屋事件、生麦事件	孝明天皇の妹和宮が徳川家茂と婚礼
文久3(1863)年	洲崎(現下宮町)に台場(砲台)が築かれる	薩英戦争戦争で集成館など焼失	八月十八日の政変で京都から長州を追放
元治元(1864)年		開成所設置	禁門の変、第一次長州征伐
慶応元(1865)年		集成館機械工場完成、薩摩藩英国留学生派遣	
慶応2(1866)年		薩長同盟締結、薩摩藩米国留学生派遣	第二次長州征伐
慶応3(1867)年		パリ万国博覧会出展、鹿児島紡績所設置	薩土盟約、大政奉還、王政復古の大号令
明治元(1868)年	瀬戸口藤吉生まれる	戊辰戦争（～69年）	五箇条の御誓文、明治改元
明治2(1869)年		藩政改革	東京都遷都、版籍奉還
明治3(1870)年		鹿児島医学校兼病院設置	
明治4(1871)年		西郷隆盛が藩兵を率い上京（御親兵）	廃藩置県、岩倉使節団が出発(～73年)
明治6(1873)年	西郷隆盛、郷校松尾小学校と私塾高野塾を視察	西郷隆盛下野、大久保利通が内務卿に就任	明治六年の政変
明治7(1874)年	西郷隆盛、新城に狩りに来るようになる 和田英作生まれる	西郷隆盛が私学校を設立	佐賀の乱、台湾出兵
明治8(1875)年	私学校新城分校が開校		
明治9(1876)年	今の垂水小学校お長屋で私学校が始まる		神風連の乱、秋月の乱、萩の乱
明治10(1877)年	牛根、垂水、新城からも西南戦争に出兵	西南戦争、西郷隆盛自刃	
明治11(1878)年		大久保利通暗殺	
昭和33(1958)年	垂水市制実施		

【参考・引用文献】

2005 落合弘樹「西郷隆盛と士族」吉川弘文館

2016「明治維新と郷土の人々」
鹿児島県知事公室政策調整課

1980「垂水市史（下）」垂水市教育委員会

1980「垂水市史料集(一) 西南の役従軍記」
垂水市教育委員会

1982「垂水市史料集(四) 石塔編」垂水市教育委員会

1991「垂水市史料集(十) 新城編」垂水市教育委員会

西郷メモ

本書を読んで、西郷隆盛と垂水の関わりについて、あなたが新しく知ったことや、感じたこと、垂水への思いなどを自由に書いてみましょう。

【問い合わせ先】

垂水市教育委員会社会教育課文化スポーツ係

電話：0994（32）7551

【印　刷】

株式会社 新生社印刷

〒893-0013　鹿児島県鹿屋市札元1-22-34

電話：0994（43）2238